



セネガルの子どもたちに教育を！

バオバブの会 ニュースレター

2018年 No.3
(通巻56号)
8月5日発行

記録的な猛暑が続いていますが、お元気でお過ごしでしょうか。

今回は上半期の活動報告を中心にお届けいたします。ご寄附、情報提供などのご支援、イベント出展の際、スタッフやお客様としてのご協力、本当にありがとうございました。

下半期もよろしくお願い申し上げます。

活 動 報 告

*** あーすフェスタかながわ2018 ***

日時：2018年5月19日（土）～ 20日（日）10:00～16:00

会場：神奈川県立地球市民かながわプラザ「あーすぷらざ」（横浜市栄区）

主催：あーすフェスタかながわ実行委員会

<http://www.earthplaza.jp/earthfesta/>

バオバブの会は今年も食販と物販で参加しました。天候にも恵まれ、ヤーサ（レモン風味のチキンシチュー）、マーフェ（ピーナッツソースのビーフシチュー）、ベニエ（西アフリカのドーナッツ）、アターヤ（セネガルのミントティー。日曜のみ）のいずれも完売しました。物販では、セネガルのお母さんたちが作った、おなじみケベサックやアクセサリー、絵本などを販売。新デザインのバッグやポーチもこのフェスタで初登場となりました。

*** アフリカ日比谷フェスティバル ***

日時：2018年6月23日（土）～24日（日）10:00～21:00（24日は17:30まで）

会場：日比谷公園（東京都千代田区）

主催：アフリカヘリテージコミティー

<http://africah.web.fc2.com/event/index.html>

こちら物販で毎年出展している恒例イベント。天候に恵まれた日曜はもちろん、雨天となった初日も、例年にも増して来場者が多く、音楽、食事、太鼓隊のパレード、アフリカ大陸型のおみこし練り歩き（!）などで大いに盛り上がりました。バオバブの会のブースにもお客さんが途切れることなく、ケベサック、アクセサリー、セネガル服等、いずれも好調な売れ行きとなりました。

***** セネガルフェスティバル *****

日時：2018年7月8日（日）10:30～17:00

会場：SKIPシティ 彩の国ビジュアルプラザ・映像ホール（埼玉県川口市）

主催：ASJ（在日セネガル人協会）

バオバブの会のディウフ会長もメンバーである在日セネガル人協会の主催により、セネガル音楽と料理を楽しむイベントが開かれました。ライブ出演は、昨年のバオバブの会チャリティーコンサートにも出ていただいたアブドゥ・バイファル、一昨年の福引きパーティーに出ていただいたワガン・ンジャエ・ローズ、そしてラティール・シー、ブジュ・シソコほか、超豪華メンバー。バオバブの会は物販で参加し、おなじみケベサックやアクセサリー、絵本等を販売しました。

***** ゴスペルスクエア10周年コンサート *****

日時：2018年7月14日（土）開場15:00、開演15:30、終演18:30

会場：渋谷区文化総合センター大和田・さくらホール

主催：NGOゴスペル広場

<http://www.gospelhiroba.com/html/index.html>

ゴスペルの教室やコンサートを通じて国際協力を行うNGOゴスペル広場（GQ）が今年で10周年を迎えました。記念となるこのコンサートでも、例年通りバオバブの会はロビーで物販を行いました。また、今年も出演者のかたがたやお客さんから多くの募金をいただきました。

お知らせ

10月6日（土）、7日（日）、8日（月・祝）の3日間、みなとみらいのグランモール公園にて、**横浜国際フェスタ2018**が開催されます。

バオバブの会は、このフェスタに、7日と8日の出展を申し込んでいます。

参加が決定次第、ホームページ（バオバブの会 URL：the-baobab.org）、またフェイスブック（バオバブの会The Baobab Association URL：<http://www.facebook.com/the.baobab.association>）でご案内いたしますので、多くの皆様のご来場をよろしく願いいたします。

<ライオンが彼ら自身の歴史家を持たない限り、狩りの歴史は狩人の栄光を謳うものでしかないだろう。>ということわざがあります。

このことわざを私は次のように言い換えます。<アフリカ人が彼ら自身の歴史を書かない限り、かつての植民者であるヨーロッパ人によって書かれたアフリカの歴史は、植民地主義を正当化し、植民者を称えるページだけを集めたものになるだろう。>

しかし、これは、皆さんのようなアジアの読者にとっては少し説明が必要でしょう。なぜなら、皆さんは、ヨーロッパとアフリカ間の歴史をめぐって長く続いている多くの論争について、あまりご存じないように思われるからです。

これらの論争的としては、次のようなものがあります。

- ・植民地政策は否定的な結果しか生まず、アフリカにとって肯定的なものは何もなかったのだろうか？
 - ・ヨーロッパは、アフリカの人々と財産に対して犯した残虐非道な行為に対して、謝罪をするべきではないのか？
 - ・ヨーロッパは、植民地支配のためにアフリカの国々が今もなお経済的に立ち遅れている現実について、責任をとるべきではないか？
 - ・平和は正当な裁きの上に成り立つ。したがって、ヨーロッパは、アフリカとの友好的な関係を求める前に、アフリカに与えた損害に応じた償いをするべきではないだろうか？
- そしてまた、
- ・アフリカは、新たなページを開き、彼ら自身の発展のための責任を担って働くべきではないだろうか？

ヨーロッパとアフリカでさまざまな出来事が起こる度に、こういった問題で新たな論争が生まれ、拡大し、一定期間のあと鎮静化したりしています。そして、このような現象のごく最近の例として、ワールドカップ2018ロシア大会があります。ご存知のようにフランスが優勝しましたが、そのフランスのナショナルチーム、レ・ブルー (Les Bleurs) の主力は、アフリカ系の選手でした。

実は、ワールドカップ終了後に詳しく新聞を読んでいなかった私は、友人がネットに載ったひとつの記事を送ってくれるまで何も知りませんでした。その記事とは、ベナン人のアフリカ史研究者、ダガン・ディウドネ・ニャンマンク (Dagan Dieudonné Gnamankou) によって書かれたものでした。

記事の大意は「何世紀も前から、アフリカ人はフランスで暮らし、あらゆる分野でこの国の発展に貢献してきた。」というもので、ニャンマンクはこれについてたくさんの例をあげています。

ほとんどのフランス人は、この事実について何も問題にしていません。しかし、一部のエリート階級、時代遅れで反動的で今でもナポレオンを信奉しているような人々は、これに対して不快感を持ち、フランスの

歴史からアフリカ人の英雄の足跡を消してしまうためにやっきになっています。

その一例としてニャンマンクがあげているのが、ワールドカップ優勝のあと、エリーゼ宮の入口の階段で撮影された、フランスチームの公式写真です。その中で、チームの支柱であったはずのアフリカ系の選手たちは、真ん中ではなく、画面の奥や隅っこに追いやられています。ニャンマンクは、これを、「かつてナポレオン・ボナパルトとド・ゴールなど多くの指導者が記憶すべき事例を作った不正と忘恩の印が、未だに存続していることの現れ」だと言っています。

私は、それらの中から、最も明白な事例として、ナポレオンがおこなったものをお伝えします。他の指導者によるものは、解釈が分かれ、論争を引き起こす恐れがあるからです。

ナポレオンは、1789年、フランスの人々を解放するためにクーデターを起こしましたが、その後の1802年に、1772年に廃止されていた奴隷制度の復活を決めました。これは、**<白人は自由と尊厳に値するが、黒人はそうではない>**ということなのです。

ナポレオンは、フランスの植民地であったサン・ドマング（現在のハイチ）の奴隷制再構築を、将軍トーマス・アレクサンドル・デュマに託しました。ニャンマンクは言います。「デュマ将軍は、フランス革命下のフランス軍の中で最も高い階級を有する将校のひとりであった。ナポレオンがクーデターを起こす前は、ナポレオンよりも高い地位にいたのであり、当代一の軍人として広く知られていた。ところが、彼の母親はヨルバ人^{注1}の奴隷であった。」

ですから、彼にこのような命令を下すこと自体が、極めて下劣な行為だったのです。当然、デュマ将軍は拒否します。「なんだと？ 私の母や姉妹を再び奴隷制の鎖につなぎに行けだと？ ノン！」

すると、ナポレオンは、フランスだけでなくヨーロッパ中で最も人種差別的な法律を公布したのでした。

- ・白人と黒人の結婚の禁止
- ・フランス国内のグランゼコールから、すべての黒人の学生を排除
- ・ただちに、また補償金を支給することなく、フランス軍内のすべての黒人将校を更迭。もちろん、彼の命令を拒否したトーマス・アレクサンドル・デュマを含む。

そして、ナポレオンは、最終的に、この使命を、義弟（ナポレオンの妹、ポーリーヌの夫）であるルクレール将軍に託しました。しかし、ルクレールは、サン・ドマングの人々の断固たる抵抗を前にして挫折し、黄熱病のため客死。一方、これを機にサン・ドマングは独立を勝ち取り、世界で初の黒人国家ハイチ帝国となりました（1804年）。

これが、ヨーロッパの人種差別の歴史の中の1ページです。そして、ヨーロッパの歴史家で、これを明らかにする勇気を持つ人はほとんどいないのです。

ニャンマンクは、また、ナポレオンのデュマ将軍に対する忘恩の行為である、ひとつのエピソードを紹介しています。1798年7月、エジプトで反乱が勃発し、ひとつのモスクが占領されました。そのモスクを解放したのは、デュマ将軍に率いられた遠征軍の騎兵隊でした。ところが、「ナポレオンが、カイロのモスク奪還を記念するため、フランス騎兵隊の勝利を描いた絵画制作を命じたとき、画家がその絵の中央に描いたのは、金髪の白人将校であった。」

ニャンマンクは、フランス人の共通の記憶から消されてしまった、アフリカ人とアフリカ系の人々を列挙しています。

- ・ナポレオンの敵となったデュマ将軍は、フランス人には全く知られていません。

・ムラート注2でもと奴隷のデュマ将軍の息子が、その作品が世界中で最も訳され、さかんに映画化もされているフランスの文豪、アレクサンドル・デュマであることを知っているフランス人はほとんどいません。

・黒人のガストン・モネルヴィル(1897-1991)が、20年間、フランスの上院議長をつとめたことも忘れられています。

・19世紀、パリ市長と運輸大臣をつとめたセヴェリアノ・ド・エレディア(1836-1901)が、キューバ出身の黒人だったことを、何人のフランス人が知っているのでしょうか。

こうして、ニユンマンクは、フランス人の共通の記憶の中からアフリカ人の英雄を消すことに懸命な人々を非難していますが、同時に、ワールドカップで、アフリカ系フランス人とアフリカ出身の人々に国を代表する権利を認めた、フランス人の現実主義を指摘しています。

「自分たちは人種差別主義者だとあからさまに言い、黒人であるからという理由で優秀な選手を国のチームに選抜するのを拒否する、ヨーロッパや他の地域の国々は、全くどうしようもない！ 彼らは、何人かのイタリア人やクロアチア人のように、最終の試合で戦ったのはフランスではなくアフリカだと馬鹿なことを言い、これからも言い続けるだろう。いつか自分たちの愚かさに気づき、アフリカ系の同胞に国を代表する権利を認めなかったためにワールドカップで優勝を逃したのだ、と理解する日まで。私はそんな日がくることを願っている。」

しかし、ニヤンマンクは、フランス人の現実主義を認めてはいても、それを称賛してはいません。なぜなら、フランス人の現実主義とは、結局、次のようなものであるからです。「黒人がフランスの繁栄と栄光に役立つことができる限り、彼らを使おう。第2次世界大戦の際も、黒人部隊注3がフランスを救った。だが、我らの歴史家は、彼らの偉業をフランス人の記憶の中から消し、生粋のフランス人の長所を称えることができるだろう。」

アフリカへの進出(17世紀)の当初から、フランス政府は、フランス人に、アフリカとアフリカ人に関する間違っただ情報、<アフリカ人は野蛮である>というイメージを与えていました。それは、フランス人の中に、<野蛮なアフリカとアフリカ人を文明化する>という使命感を植え付け、強固にするためでした。そして、その<文明化>とは、略奪と悪用の言い換えでしかありませんでした。

それにしても<野蛮>とは！ どうやったら、野蛮な人々が、ヨーロッパの美術館や個人のコレクションを満たすために盗む注4に値する作品を作り上げることができるのでしょうか？

このように、フランス人の現実主義も、歴史の中からアフリカ人の貢献の事実を消すという政策と同様、17世紀のアフリカ進出以来の流れの中にあるわけです。しかし、今日、それらが向けられているのは、各種のメディアを持ち、実際に旅をすることもできる、近代的なフランスの人々なのです。したがって、このような主義や政策を貫くためには、より巧妙な方法を使わなければならなくなっています。

ですから、アフリカ人は、今こそ、彼ら自身の歴史を書かなければなりません。

アフリカのリーダーたちは、人々を養い、面倒をみる日々の業務に忙殺されているのでしょうか？しかし、そうだとすると、それが自ら正しい歴史を書くことを怠る理由にはなりません。なぜなら、間違っただ歴史が

普及することは、リーダーの政策や業務の誤りと同じくらい、致命的なものだからです。「本当であれ、嘘であれ、言われたことは、その人がやったことと同じくらい、その人の未来を左右する」と言います。歴史を自らの手で書かない限り、世の中の人々の眼には、その本当の姿ではなく、思われているイメージ、言われている姿しか見えていかないということです。現在、世界の多くの人々がアフリカ、及びアフリカ人について持っているイメージは、本当のアフリカでもアフリカ人でもありません。アフリカがアフリカ自身の手で歴史を書かない限り、この間違っただイメージがいつまでも生き続けていくことでしょう。

注1：主にナイジェリア南西部に居住し、西アフリカ最大の民族集団のひとつで、紀元前4世紀からの歴史を持っています。ナイジェリアにおいては、ハウサ人、イボ人とともに三大民族のひとつとなっています。

注2：南北アメリカには、アフリカ黒人奴隷が大量にプランテーションの労働力としてもたらされました。その過程で生まれた白人男性と黒人女性との混血をムラートといいます。トーマス・アレクサンドル・デュマは、サン・ドマングで農場を営んでいたフランス人貴族と、ヨルバ人の奴隷女性との間に生まれた子どもでした。デュマの父親は、フランス本国に帰るとき、妻や他の子どもと一緒にデュマを奴隷商人に売り飛ばしました。後に買い戻されたとはいえ、デュマも、一時期、奴隷だったのです。

注3：かつてフランスのアフリカ植民地において、現地人で編成された部隊。北アフリカ（アルジェリア、チュニジア、モロッコ）やセネガル人部隊がよく知られています。

注4：アフリカの国々は、ヨーロッパ各地にあるアフリカの文化遺産：絵画、彫刻、マスク、玉座などの返還要求をおこなっています。

バオバブの会

〒240-0052 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西谷町993-35

TEL&FAX 045-373-0059 HP:<http://the-baobab.org>

代表 エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

寄付振込先:

三菱UFJ銀行八重洲通り支店普通口座no.1523673

ゆうちょ銀行振替口座 00200=1 45215